

小論文

第1問

下記の文章は、永井洋一『スポーツは「良い子」を育てるか』(NHK 出版、2004 年、191-196 頁)の一節である。文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、本文の一部を改変した。

日本では、スポーツという言葉から鍛錬、忍耐、克服、努力などといったイメージが引き出されます。スポーツの世界に一度足を踏み入れたからには、相当な覚悟で取り組み、多少辛いことがあっても我慢して継続することが当たり前と思われています。軽い気持ちで参加したり、不定期に参加するような態度は、スポーツを行うものとして相応しくないと考えられています。しかし、スポーツとは本来それほど堅苦しい、窮屈なものではないのです。

スポーツ (sports) という言葉は 16 世紀から現れるそうですが、増田靖弘著『スポーツ語源散策』によると、その語源はラテン語の *desportare* という言葉にあるそうです。*desportare* の *des* は英語の *away* に当たる接頭語、*portare* は *carry* に当たる意味ということで、*desportare* は「運び去る」、あるいは「連れ去る」という意味を含んでいるということです。増田氏は「いまでいえば気分転換に遊ぶ、楽しむなどに通じる言葉である」としています。スポーツとはもともと、日常生活を離れて、楽しみながら気晴らしをすることなのです。

プロ選手として生計を立てている人以外は、スポーツをしても経済的な利益はほとんど生み出せません。スポーツはむしろ時間、体力を浪費する非生産的な行為です。スポーツには、敗戦という不愉快な結末も 50% の確率で用意されています。また、スポーツで怪我をすることも少なくありません。サッカー、ラグビーなどのコンタクトスポーツでは、試合中に苦しさ、辛さ、痛さを随所で感じます。モータースポーツ、格闘技などでは命を落とすことさえあります。客観的に覚めた目で見れば、「なぜあんなことをするのだろう」ということを、人はあえてスポーツとして行っているのです。お金が儲かるわけでもない、負ける悔しさもある、痛くて苦しいこともある、ときには命の危険もあるスポーツを、人はなぜするのでしょうか。

それは、スポーツをすることで「心」が満たされるからにほかなりません。①たとえ一銭にならなくても、試合に敗れても、激しいプレーで怪我をしても、ぶつかり合いに苦しさ、辛さ、痛さを感じても、ときには命の危険を感じても、スポーツを行っている最中に得られる快感が人々の心をつかんで離さないからです。では、その「快感」の源とは何でしょうか。それは、広い意味ではスポーツの語源である「気晴らし」が実現することなのですが、なぜスポーツをすることで「気が晴れる」のかという部分が重要です。

「気が晴れる」と感じるのに必要な要素はいろいろありますが、「自己表現ができた」と感じる

こともその一つでしょう。人は、労働などの経済的生産活動とは別の次元で、文章を書く、歌をうたう、物を創るなど、さまざまな形で自己表現をします。それは誰でも、自分が感じ、考えたことを表現し、それを人に理解してほしいという欲求を持つからです。スポーツもそれらと同様、自己表現の欲求を満たす行為の一つと考えられます。

スポーツのプレーの一つひとつは、プレーする人の判断によって進められていきます。スポーツでは、すべての瞬間にプレーする人の意志が生かされるのです。つまりスポーツは、それをプレーする人の意志を具現する自己表現の手段といってもいいのです。敗戦という不快な結末が50%の確率で用意されていても、怪我をしても、苦しさを感ずいても、命の危険を感じても人々がスポーツに打ち込むのは、一つひとつのプレーの中にこの自己表現の快感があるからにはほかありません。

自分の感じたこと、考えたことを体を使って自由に思い切り表現できる機会など、日常生活の中にはそうそうありません。それどころか、自分の意志や行動を制限されることのほうが多くあります。だからこそ、スポーツという自己表現の場が人々を惹きつけ、日常生活ではなし得ない「気晴らし」ができるのです。そのためには、無数の選択肢の中から自分の感じ方、考え方を基準にして一つのプレーを選び、実行に移すことが必要です。(中略)

スポーツを行って「気が晴れる」ことに関係する、もう一つの要素があります。それはスポーツのプレーがもたらす「コンピテンス」です。コンピテンスとは、心理学の世界では「有能感」などと訳されています。「有能感」とは、私たちが自分の周囲の何かに対してあることを働きかけたときに、その何かを自分自身の力で多少なりとも動かし、変化させることができたときに、「やった！」と感じる充実感です。心理学者のR・W・ホワイトは、人間は誰でもこのコンピテンスを感じるによって、次なる行動に向かっていく意欲を持ち続けることができるとしています。

スポーツで最もコンピテンスを感じるができる瞬間は、勝利を得たときでしょう。勝利の喜びは苦しい練習や辛いスランプを一気に忘れさせてくれます。ところが、何度も繰り返すように、スポーツの試合で勝利を得る確率は常に50%です。さらに大会の優勝を目標にするというなら、それを達成する確率はもっと低くなります。多くの人は勝利、あるいは優勝によるコンピテンスを感じるができずに終わります。しかしスポーツには、勝敗とは別の部分にもコンピテンスをもたらす要素が溢れているのです。例えばそれは、イメージ通りのプレーができた瞬間、息の合ったコンビネーションが達成できた瞬間などに感じる、言いようのない充実感です。選手たちは、こうした感覚が得られるプレーを「納得のいくプレー」などと表現することがあります。

なぜ選手が「納得のいく」のかといえば、それは自分で悩み、考え、選択した結果、イメージ通りのプレーができたからでしょう。しかしこれが、自分の判断に関係ない次元で、他人の指示通り動いた結果のプレーだったらどうでしょう。仮にそのプレーで勝利を得たとしても、選手はあまり深く納得しないのではないのでしょうか。心理学者のド・シャームは、私たちの行動が何か結果となって表れたとき、それが「自分自身で決定した結果である」という実感を持つことが、次への行動への強い意欲につながるとしています。このように、他人の指図によるのではなく、

自分の意志が反映したことによって何かの変化が起きた、ということを実感したいとする感覚は、「自己原因性」を欲する心理と表現されます。人は、「自分でやった」という自己原因性が実感できることで、「自分はできるのだ」というコンピテンスを得ることができるのです。

どんなスポーツ種目でも、たとえ試合に敗れることがあっても、一つひとつのプレーの中で、自己原因性に基づくコンピテンスを体得するチャンスがあります。それこそが、スポーツが人々を惹きつけて離さない、最も大きな理由だと私は思います。言い換えれば、自分の意志でプレーを選択していけるような環境が与えられれば、人はいつでもスポーツを堪能し、スポーツを愛することができるのです。逆に、一つひとつのプレーにまで他人の意志が強く入り込むのであれば、自己原因性によるコンピテンスを体得するチャンスは狭められます。

ところが現実には、日本のスポーツ環境では、子供のプレーに大人の意志が強く入り込むケースが数多く見受けられます。大人が勝利するための手段を徹底して「教え込む」からです。そこでは子供たち自身の選択の余地はかなり狭められています。重視されているのは、「いかに迷わず決められた通りに動くか」ということです。こうした、②いわば「調教スポーツ」の中では、子供は自己原因性のコンピテンスは得にくいでしょう。なぜスポーツが楽しいのか。スポーツから何を得るのか。その原点に立ち返るなら、子供たちを「調教スポーツ」に送り込んではいけません。

設問

(1) 下線部①たとえ一銭にならなくても、試合に敗れても、激しいプレーで怪我をしても、ぶつかり合いに苦しさ、辛さ、痛さを感じても、ときには命の危険を感じても、スポーツを行っている最中に得られる快感が人々の心をつかんで離さないからです。とあり、筆者はその源としてスポーツの語源を意味する、「気が晴れる」ことをあげています。この「気が晴れる」具体的な要素について、60字以内で答えなさい。

(2) 下線部②いわば「調教スポーツ」の中では、子供は自己原因性のコンピテンスは得にくいでしょう。なぜスポーツが楽しいのか。スポーツから何を得るのか。その原点に立ち返るなら、子供たちを「調教スポーツ」に送り込んではいけません。とあります。

(i) 自己原因性のコンピテンスとはどのようなものか、そして「調教スポーツ」の中ではなぜそれが得にくいのかについて、200字以内で説明しなさい。

(ii) 「調教スポーツ」に送り込まないために大人は子供たちにどのように接するべきかについて、筆者の考えに則しつつ、あなたの経験あるいは考えも含めて250字以内で述べなさい。

第2問

下記の文章は、横浜 DeNA ベイスターズ代表取締役社長・池田純『空気づくり方』（幻冬社、2016年、158-162頁、<http://plus-j.jp/>）から抜粋したものである。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ベイスターズを含むプロ野球（プロスポーツチーム）の「組織」には、球団職員で構成される組織（会社）ともう一つ、選手を中心とする「チーム」という組織があります。

経営とチームは、球団という車の両輪です。この二つのバランスが欠けていては、未来へと確実な歩みを進めることはできません。会社組織をいい空気で満たすことが重要なと同様、チームの中にもいい空気をつくり上げることがひじょうに重要です。

私はベイスターズの球団社長に就任して以来、経営再建とともに『チームの空気づくり』も明確に取り組むべき一つの目標とし、力を注いできました。

初年度の春季キャンプを翌日に控えた 2012 年 1 月 31 日の夜、私は沖縄のホテルで、選手・コーチ陣全員を前に次のような話をしました。

「経営は、私が必ず再建してみせる。ファンと観客動員数を増やして全試合満員にし、必ず健全経営（黒字化）を実現してみせる。だから、選手みんなには、そのファンのために必ず結果を出せるようなチームになってもらいたい。これからは、経営とチームが一丸となって戦っていく組織をつくるから、各々の役割をしっかりと担ってもらいたい。チームに課せられた役割、それは言うまでもなく、勝つことだ。」

それ以外にも、観客動員数の推移や球団の経営状況、ファンサービスの必要性、そしてファンがチケットを買って来場してくれていることが選手年棒の源泉であることなどなど、経営について端的にわかりやすく、私自身の言葉ですべて説明しました。前経営体制の時代も含めて、選手たちに経営の話をするのは史上初めてのことで、しかもまだまだ私に対する不信感が強い初期の段階でもあったため、「これからキャンプだというのに何の話だ？」といった心のうちが選手たちの表情にありありと表れていたのをよく覚えています。

「俺たちは野球をやるんだ。経営なんて関係ない」そういった空気が実際の声としても漏れ聞こえてきました。チームの空気づくりは、そんな状況からスタートしました。

（中略）

そうして年を追うごとに、選手たちの意識も明らかに変わっていきました。①順位は相変わらず 5 位か 6 位の低空飛行にもかかわらず、観客の入りが目に見えてどんどん増えている。満員の日がどんどん増えていく。さまざまなイベントをやり、スタンドの歓声が増えるごとに、選手たちのファンサービスへの協力姿勢もものすごく高まっていきました。

（中略）

球団からのファンサービスやイベントへの協力依頼にも、試合前や試合後の自身のパフォーマンスコントロールで大変であるにもかかわらず、ほとんどのことに前向きに協力してくれるチー

ムに生まれ変わりました。ファンの大切さは、スタンドがガラガラだった時代を知る選手たちを筆頭に、彼ら自身が一番理解しているのではないかと思います。

「満員のホームスタジアムでプレーするのは最高です」

選手たち自身から、そんな実感のこもった言葉をよく聞きます。

「次は俺たちの番ですよ」

「チームが成長しているとはいっても、これまでは結局 5 位とか 6 位で悔しい。絶対に勝ちたいんです」

ベテランや主力選手の実際の言葉です。選手たちとそんな会話を交わすたびに、

「そう、こういう空気が必要なんだよな。勝ちたいと心底思わなきゃいけないのは、実際にプレーする選手たちなんだから」と、涙が出そうな気持ちになります。

最初のうちは「絶対に勝つんだ」という空気よりも、そうではない負け癖のような空気を感じることが多くありました。戦いの中で、あるいは戦う前からすでに、空気で負けてしまっていることをしばしば感じました。しかし 5 年を経た今、「次に結果を出すのは自分たちだ」という空気が強く醸成されたチームに生まれ変わったと私は感じています。

設問

(1) 本文中には、選手の心境の変化が描かれています。どのような変化が起こったのか、またその理由を 150 文字以内で述べなさい。

(2) 本文は、球団社長という立場から「スポーツ組織」を述べたものであり、下線部①「順位は相変わらず 5 位か 6 位の低空飛行にも関わらず、観客の入りが目に見えてどんどん増えている。」という様子は球団経営の特徴ともいえる部分です。どうすればチームが弱くても集客できるようになると考えますか？あなた自身の考えを 350 字以内で述べなさい。